九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法III．つる，竹

内海，泰弘
九州大学農学部附属演習林

村田，育恵
九州大学大学院生物資源環境科学府森林資源科学専攻

椎葉，康喜
九州大学農学部附属演習林

宮島，裕子
九州大学大学院生物資源環境科学府森林資源科学専攻

他

https://doi.org/10.15017/17056

出版情報：九州大学農学部演習林報告．91，pp.15-18，2010-03-25．九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九大演報（Bull. Kyushu Univ. For.），91：15-18，2010

論　　文

宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法 III．つる，竹*

内海泰弘**，村田育恵***，椎葉康喜**，宮島裕子***，井上　晋**

宮崎県椎葉村大河内地区における植物の伝統的な利用法と方言を記載した。これまでに高木類と低木類について報告してきたが，本報告ではつる植物32種とタケ類８種およびシュロについて複数の年長者からの聞き取り調査結果をまとめた。つる植物のおもな用途は縄，器具材，食材であり，タケ類のおもな用途は建築材，器具材，筍であった。つる植物で縄に用いられたのは５種あり，つるの物理的性質に応じて使い分けられていた。タケ類の中ではハチクとマダケが重要種で屋根材や生活用品の材料として重用された。他の多くのつる植物とタケ類は季節ごとに多様な食料として地域の生活を支えていた。

キーワード：建築材，器具材，縄，筍，聞き取り調査

１．は　じ　め　に

宮崎県椎葉村大河内地区は山林が大部分を占める山岳地域であり，人々は森林に生育する様々な植物を利用して生活を営んでいる。しかし，これまでに報告してきたように植物の伝統的な利用法を知る人の数は減り続けてきた（内海ほか 2007，2008）。やがて消滅する危険性のある地域固有の植物方言とその伝統的利用法に関する知識を保存しておく必要がある。我々はこれまで大河内地区における高木および低木の民俗学的利用を記録してきた（内海ほか 2007，2008）。本研究では，引き続き大河内地区に生育するつる植物，タケ類の伝統的な利用法とその方言について報告する。

２．調査地の概要と調査方法

調査地の概要と調査方法は前報に準じた（内海ほか 2007）。宮崎県東臼杵郡椎葉村大字大河内地区を調査対象区とし，大河内地区で生を受け，幼少期から現在に至るまで当集落に居住されている年長者の中で，植物名とその利用法に詳しい73歳から79歳までの８名の方を対象者とした。2006年から2009年にかけてつる植物及びタケ類の大河内地区での呼称とその利用法について各人に最大３回調査を行い，得られたデータは当地区出身の椎葉と，当地区にそれぞれ11年，６年，３年，２年居住ないし滞在した井上，内海，村田，宮島とで検討を加え，複数の人から確証が得られた樹種を選抜し記載した。

３．結果と考察

つる植物は自らの力で体を支えることなく，他のものにとりついて成長する植物で（酒井 2009），木や草から二次的に生まれてきたと考えられている（鈴木 1997）。本報告では木本，草本にかかわらずつる植物としてまとめて述べる。表１につる植物29種の学名，標準和名，大河内地区での呼称，用途等を示す。種の記述法は佐竹ら（1989a，b）と米倉と梶田（2003-）に準じた。なお，呼称や用途で区別されずに用いられていたカラスウリとキカラスウリ，モミジカラスウリをカラスウリ類，ツヅラフジとアオツヅラフジをツヅラフジ類として記した。

つる植物のなかで縛る道具としてはマツブサとサルナシ，ツヅラフジ類が日常的に使われる重要な材料であった。マツブサは建築材を縛るのに最適とされ，茅葺き民家の屋根の軸組を縛る際に用いられた。水に濡らした状態では柔らかいが，乾燥すると硬くなるので，古民家を解体する際にマツブサのつるを切るのは容易ではなかった。集落近くに生育していないため，標高の高い演習林付近で採取することが多かった。全国的には建築材の結束に使用する種としてマンサクの事例があり（倉田 1971），飛騨白川の合掌造りの大きな家屋の軸組はマンサクの枝条で縛りあわせたものがある（平井 1996）。一方，マツブサは生薬としてのつるの利用が見られる程度である（長澤 2001）。当地区ではマンサクは標高1400m以上の山頂部付近にしか生育しておらず，採取が困難かつ個体数が少ないため利用されなかったと考えられる。サルナシはハシツリカズラと呼ばれ曲げにくいので細工物には向かないが，強度が大きいため吊り橋を架ける際の材料に用いられた。サルナシはかつて日本各地で吊り橋や筏を組む材料に使われており（上原 1959），国の重要有形民俗文化財に指定されている四国祖谷渓のかずら橋もサルナシで架けられている。当地区では籠を編む

* Yasuhiro Utsumi, Ikue Murata, Yasuki Shiiba, Yuko Miyajima, Susumu Inoue : The traditional name and usage of plants in Okawachi area, Shiiba Village III. Lianas and Bamboos.
** 九州大学農学部附属演習林　Kyushu University Forests, Kyushu University
*** 九州大学大学院生物資源環境科学府森林資源科学専攻　Department of Forest and Forest Products Sciences, Graduate school of Bioresource and Bioenvironmental Sciences, Kyushu University
（2009年10月30日受付；2010年１月８日受理）

場合はツヅラフジ類のつるを用いた。ツヅラフジ類のつるには他の植物などに巻きついて登攀するものと地面を匍匐してのびるものがあり，籠の材料になるのは地面を匍匐したつるの１年生の部位である。これを秋に収穫し腰に下げる籠などを編んだ。ミツバアケビのつるも同じように籠を作るために使われたが，ツヅラフジと比較すると材質が劣るとされている。そのほかヤマフジのつるが牛をつなぐひもに使われ，クズのつるでヒエ・アワ・ソバなどの穀物を縛った。

表1. 大河内地区におけるつる植物の方言と用途

学名	類名	和名	方言	用途等
Rubia argyi		アカネ	アカネカズラ	
Akebia quinata		アケビ	ユウダチアケブ	実を食用とする．ミツバアケビよりおいしいという人もいる．
Schizophragma hydrangeoides		イワガラミ	なし	
Berchemia magna		オオクマヤナギ	クロガネカズラ	牛の鼻輪にした．大河内白太鼓の鐘をたたく槌の頭に使う．
Aristolochia kaempferi		オオバウマノスズクサ	なし	
Trichosanthes spp.	カラスウリ類	カラスウリ,キカラスウリ,モミジカラスウリ	コベ，チュウチュクベエ	枝を刺して動物を模したおもちゃを作った．根をたたいてデンプンを採取し食用とした．味はクズと比べてよくない．
Hedera rhombea		キヅタ	なし	
Pueraria lobata		クズ	カズネカズラ	収穫した穀物の茎を縛った．大きな根はたたいて搾り，沈殿したデンプンを食用とした．水にさらした際に残る黒いもので団子を作った．絞りかすに着火し藁でくるんで腰につけ蚊除けとした．
Kadsura japonica		サネカズラ	ビンツケカズラ	茎を削って水に浸すと出てくる粘液を整髪料とした．
Smilax china		サルトリイバラ	サルカケイゲ	葉を団子の敷物にする．実を唇で吹き上げ，吹き上げている時間を競って遊んだ．
Actinidia arguta		サルナシ	ハシツリカズラ	実を食用とする．つるは強度があるので吊り橋の材料とした．
Vitis flexuosa		サンカクヅル	ヤマブドウ	甘みのある実を食用とする．
Smilax riparia var. ussuriensis		シオデ	シオデ	新芽を食用とする．
Lonicera japonica		スイカズラ	なし	
Parthenocissus tricuspidata		ツタ	なし	
Toxicodendron orientale		ツタウルシ	ウルシカズラ，ハゼカズラ	触れるとかぶれる．
Sinomenium spp.	ツヅラフジ類	アオツヅラフジ，ツヅラフジ	ツヅラカズラ	地面を匍匐するつるの一年生のまっすぐに伸びた部分を秋に採取し，籠材とする．以前は業者が買い取りにきた．
Hydrangea petiolaris		ツルアジサイ	なし	
Celastrus orbiculatus		ツルウメモドキ	なし	実を鳥罠の餌に用いた．
Skimmia japonica var. intermedia		ツルシキミ	なし	
Euonymus fortunei		ツルマサキ	なし	
Cuscuta japonica		ネナシカズラ	モトナシカズラ	
Rosa multiflora		ノイバラ	アオイゲ，イゲ	実を鳥罠の餌に用いた．
Ampelopsis brevipedunculata var. heterophylla		ノブドウ	ガネブ	枯れたつるに入った虫を魚釣りの餌にする．
Wisteria floribunda		フジ	サガリフジ	
Paederia scandens		ヘクソカヅラ	ヘクソカズラ	
Actinidia polygama		マタタビ	マタタビ	実は焼酎漬けにした．虫えいを乾燥させたものを以前は買い取りにきた．
Schisandra repanda		マツブサ	ヨウラカズラ，イエクビリカズラ	つるを萱葺き屋根の家を建てる際の建材の縛り紐とした．
Akebia trifoliata		ミツバアケビ	クマアケブ，アカアケブ，アケブカズラ	実を食用とする．アケビよりおいしいという人もいる．匍匐性のつるで袋，籠などを作った．
Stauntonia hexaphylla		ムベ	フユアケブ	実を食用とする．
Wisteria brachybotrys		ヤマフジ	フジ	花と豆を食用とした．つるは石を運ぶための背負子や，牛をつなぐ紐にした．通直な部分を玄翁の柄に用いた．
Dioscorea japonica		ヤマノイモ	ヤマイモカズラ	担根体とむかごを食用とする．

表2　大河内地区におけるタケ類とシュロの方言と用途

学名	和名	方言	用途等
Shibataea kumasasa	オカメザサ	チョウサシバ	茶碗を洗っておいておくカゴを作るのに用いた.
Sasa borealis	スズタケ	スズタケ	稈をまといの矢の材料にする．筍を皮付きのまま焼くと美味であるが，小型のためあまり取らなかった.
Phyllostachys nigra	ハチク	ハチク	竹細工の材料として最良である．茅を葺くときの骨組みにした．家に水を引くときの樋にした．縦に半分に割って上下互い違いにし，簡易な小屋の屋根などを葺いた．タケノコは美味で大量に採れるので乾燥させて出荷した.
Phyllostachys aurea	ホテイチク	コサンチク，コシャン	筍はモウソウチクの次に出てくる．柔らかい部分をあく抜きせずに食べる.
Phyllostachys bambusoides	マダケ	クロタケ，カラタケ	物干し竿や稲かけ竿に使うほか，竹細工に利用する．通直なものを得るため常緑樹林の中で孤立して成長しているものを切らずにとっておく．筍は最後に出てくる．竹皮を食品包装材とした.
Pleioblastus simonii	メダケ	シノメ， シノメダケ	御幣を挟む．神楽の笛に用いる．釣竿（継ぎ竿）の材料となる．筍を食用とする.
Phyllostachys heterocycla	モウソウチク	モウソウ	田に水を引く際に節をとって半分に割り，元口に接続して水を流した．筍は他種に先駆け最初に出てくる.
Pseudosasa japonica	ヤダケ	ホウキタケ	箒の材料にした.
Trachycarpus fortunei	シュロ	シュロ	皮の繊維から水はけが良く軽い縄ができた．田植えの時のひもや，物を背負うための縄に用いた．皮はそのままで蓑の襟に用いたほか，樋や排水管等のゴミ取りに用いた．葉をシシ肉やシカ肉の包装材とした.

用材としてはヤマフジのつるの通直な部分が玄翁の柄に用いられた。これはつるがよくしなり，手に衝撃が伝わりにくい性質を利用したものである。オオクマヤナギのつるは牛の鼻輪に用られたほか，椎葉村指定無形重要文化財の大河内臼太鼓で使われる鐘をたたく木槌の頭に使われている。他地域ではかんじきや杖の材料として利用されており（倉田 1969 ; 宇都宮 2004），屈曲可能で強度が大きな材料として広く認識されていたと考えられる。

様々なつる植物の実が食用されており，中でもアケビ類の実は全国的に広く親しまれている（農山漁村文化協会 2000）。当地区のアケビ属はアケビ，ミツバアケビ，ムベの３種があり，人によりアケビが一番おいしいという人とミツバアケビがそうであるという人がいて意見が分かれた。サンカクヅルの実は食用となり（天野 1997），当地区ではヤマブドウと呼ばれ好まれた。長澤（2001）はヤマブドウよりもサンカクヅルのほうが酸味が少なく甘みが多いとしている。サルナシはキウイフルーツと同属であり，好んで食べる人もいた。カラスウリ類も人によっては食べることもあったが，味は優れていなかったようである。椎葉村不土野地区ではカラスウリ類を区別してキカラスウリが食べられる一方でモミジカラスウリは毒だとしているが（斉藤と椎葉 1995），大河内地区では果実の色，形状が異なるものがあることは認識されているものの，明瞭な区別はなかった。

つる植物の食用としての利用は実よりもむしろ根が大きかった。カラスウリ類の根からはデンプンが採取された。同所から７本以上幹が立っているものを目安とした大きな株の根を採取して食用としたが，直根であるため堀り取るのに労力を要し，美味ではなかった。クズの根からはカラスウリ類より味のよいデンプンが得られた。大きな根を叩いたのちに搾り，水にさらして沈殿したデンプンを採取した。さらした際に残るドロと呼称する黒色の物質で団子を作りこれも食した。クズのデンプンは貴重品で風邪にかかった者の見舞いに持参した。現在でもクズの周皮を除いた根は解熱，鎮痙用として「葛根」という漢方薬として取り扱われており（日本薬学会 2004），市販薬の入手が困難であった時代には理にかなった見舞い品であったといえる。一方キカラスウリの皮層を除いた根も漢方薬であり含有成分に薬理効果が認められ（日本薬学会 2004），他地域での民間薬としての利用が報告されているが（宇都宮 2004），当地域での薬としての使用は認められなかった。ヤマノイモの担根体とムカゴは広く食用されてきた。ヤマノイモの担根体の収穫適期は冬だが，この時期に落葉性のヤマノイモのつるを探すのは困難である。そのため落葉前につるをたどって根の場所を確認しておき，目印に棒などを近傍にさして収穫に備えた。食用としては上記のほかにヤマフジの葉や花，種子が利用されてきた。ヤマフジの花は各種野菜を混入させた豆腐，椎葉村の郷土料理「菜豆腐」にも使われ季節の彩りを加えている。またシオデの若いシュートは味のよい山菜として親しまれている。

そのほかのつる植物の利用として，サネカズラのつるを削って水に浸して得られる粘液を整髪剤とした。クズの根の絞りかすは着火後に藁にくるんで腰に付けて煙を生じさせるカビと呼ばれる道具を作り蚊除けとした。また，サルトリイバラの葉は団子をのせる敷物として利用されている。

タケ亜科植物は稈鞘が成長後に自然に脱落するタケ類，長く宿存するササ類，そして横に長くはう短軸型地下茎を持たないバンブー類に分けられるが，日本以外の国ではこれらすべてをタケ類（bamboos）とよぶ（小林 1997）。本報告では広義のタケ類７種およびシュロの学名，標準和名，大河内地区での呼称，用途等を表２に示す。器具材，建築材として最も用途の広いタケはハチクであった。茅葺き屋根の骨組みや簡易な屋根材，上水道の樋，物干し竿，盆に墓に供える花筒などに利用されたのは，堅く緻密な材の性

質（坪井 1982）が適していたためだと考えられる。また割裂性が竹類中第１位（農商務省山林局 1982）であることを利用して笊（ザル），篩（フルイ），箍（タガ），巻（モッコ）など様々な竹細工の最良の材料とされた。マダケは節間が長く稈形が円満で材質が均一な性質（農商務省山林局 1982）を利用し稲かけ竿や物干し竿に利用された。山の管理を行う際，ほぼ閉鎖した常緑樹の林冠に生じたギャップで成長するマダケを残して通直な竹に仕立てた。目的にかなう材料を得るため，半施業的な取り扱いがなされていたことになる。マダケの皮は竹皮の中では最も大きく，靱性と通気性があるため，食品包装材として全国的に非常に多く使われており（田中 1974），当地区では食品包装材として自家消費される他，昭和30年代までは換金林産物として積極的に収穫された。モウソウチクは節間が短く重量があるため田に水を引く樋に使われる程度であったが，皮は広くて短いことを利用して，雨傘，日傘兼用のバッチョウガサと呼ぶ傘を作り頭に被って用いた。このほかスズタケは椎葉村の伝統行事である的射に使う矢の材料とし，メダケは御幣を挟み山の神などを祭る際に用いた。メダケは篠笛の材料として広く用いられており（農商務省山林局 1982），国指定重要無形文化財の大河内神楽で使われる笛もメダケ製である。

オカメザサとヤダケを除くタケ類の筍が食用された。特に重要な筍はハチクで大量に採取できたため乾燥品を換金林産物とした。筍が出るのはモウソウチク，ホテイチク，ハチク，マダケの順であり味の良さでは一般的にマダケ，ホテイチク，ハチク，モウソウチクの順である。スズタケも味の良い筍が得られるが量が少なく処理に手間がかかるためあまり用いられなかった。筍が現れる時期が種によって異なることを認識し，春から初夏にかけて種を変えながら筍を利用してきたことになる。

シュロは皮の繊維で水はけのよく軽い縄ができることから田植えの目印用の紐や背負い縄に用いた。また養の材料に皮をそのまま用いた。シュロの繊維は強く水に濡れても腐りにくいため，結束，運搬用のほか海苔の養殖網などに広く利用されてきた（村上 1999）。繊維の性質を理解して用途を選択してきたと考えられる。

タケ類には全種に方言名が存在したが，つる植物の中には方言が存在していない種が32種（類）中10種あった。これは低木類での傾向（内海 2008）と同様に，生活上利用したり，危険を認識しなければならない植物には識別するための方言名があり，日々の生活に重要ではない種に名がつけられにくいためだと考えられる。タケ類は全種が何らかの形で利用されているが，つる植物の中で方言名のない植物のほとんどには伝統的な利用法が存在していない。一方つる植物の方言名にはハシツリカズラ，ツヅラカズラ，ビンツケカズラ，イエクビリカズラと，利用法がそのまま名前になっているものもある。大河内地区の人々が認識する植物の世界は観察し分類する植物園，標本庫ではなく生活のための資材庫であったのであろう。

謝　辞

調査にあたっては大河内地区在住の椎葉治美，松子夫妻，藤岡盛重，ミヤ子夫妻，椎葉司，君代夫妻，椎葉重行，久子夫妻，中竹和蔵氏に御教示，御示唆をいただいた。心より御礼申し上げる。

引用文献

天野誠（1997）ブドウ．（植物の世界４．岩槻邦男，大場秀章，清水建美，堀田満，ギリアン・プランス，ピーター・レーヴン監修．朝日新聞社，東京）．2–6

平井信二（1996）木の大百科．朝倉書店，東京

小林幹夫（1997）タケ・ササ類．（植物の世界11．岩槻邦男，大場秀章，清水建美，堀田満，ギリアン・プランス，ピーター・レーヴン監修．朝日新聞社，東京）．8–10

倉田悟（1969）植物と民俗．地球出版，東京

倉田悟（1971）原色日本林業樹木図鑑第３巻．地球出版，東京

村上弥生（1999）ヤシ科植物シュロの利用 －和歌山県紀北地方の事例を中心に－．日本民俗学 218：92–104

長澤武（2001）植物民俗．法政大学出版局，東京

日本薬学会（2004）薬学生・薬剤師のための知っておきたい生薬100．東京科学同人．東京．

農山漁村文化協会（2000）果樹園芸大百科16　落葉特産果樹．農山漁村文化協会，東京

農商務省山林局（1982）木材ノ工芸的利用．林業科学技術振興所，東京

斉藤政美・椎葉クニ子（1995）おばあさんの植物図鑑．葦書房，福岡

酒井聡樹（2009）つる植物．（植物の百科事典．石井龍一，岩槻邦男，竹中明夫，土橋豊，長谷部光泰，矢原徹一，和田正三編．朝倉書店，東京）．93–94

佐竹義輔，原寛，亘理俊次，富成忠夫（1989a）日本の野生植物 木本 I，平凡社，東京

佐竹義輔，原寛，亘理俊次，富成忠夫（1989b）日本の野生植物 木本 II，平凡社，東京

鈴木三男（1997）よじ登り植物の生存戦略．（植物の世界４．岩槻邦男，大場秀章，清水建美，堀田満，ギリアン・プランス，ピーター・レーヴン監修．朝日新聞社，東京）．30–32

田中信清（1974）富士竹類植物園報告 19：49–53

坪井伊助（1982）竹類図譜解説．有明書房，東京

上原敬二（1959）樹木大図説 II．有明書房，東京

内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・井上晋（2007）宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法 I 高木．九州大学農学部演習林報告 88：45–56

内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・井上晋（2008）宮崎県椎葉村大河内集落における植物の伝統的名称およびその利用法 II 低木．九州大学農学部演習林報告 89：51–61

宇都宮貞子（2004）植物と民俗．岩崎書店，東京

米倉浩司・梶田忠（2003–）「BG Plants和名－学名インデックス」（YList），http://bean.bio.chiba u.jp/bgplants/ylist_main.html（2009年 10月 25日）